

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：34307

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2019

課題番号：18K17626

研究課題名(和文)高齢保育ボランティアにみる「世代性(generativity)」の形成過程

研究課題名(英文)Acquisition Process of the Generativity in Elderly through Volunteer Childcare

研究代表者

諏澤 宏恵(SUZAWA, HIROE)

京都光華女子大学・健康科学部・講師

研究者番号：60531142

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文):放課後学習支援ボランティア15名(M=68.5歳, range54.0-86.0)のライフストーリーの語りをもとに、世代性獲得の過程を概念化した。ボランティアらは、動機形成期、移行期、維持・葛藤期を経て、学習支援プログラムへの参加を有益と感じるようになり、若い世代への助言と、知恵の共有が促されていた。また、ボランティアが子ども期に経験した遊びや学びの文化は、暴れるなどアクティビティアウトする児童との関係性をコントロールする傍ら自らも楽しむことができるツールとなっていた。すなわち、中高年者が経験する児童生徒との葛藤場面の解決は、次世代育成の自信となり、世代性獲得を促していることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で得られた結果は、中年期から高齢期を対象とする世代性育成を目的としたプログラム開発の理論的示唆を得ることが期待される。高齢者が世代性を発揮することは、世代間をつなぎ、地域の健康度や安全度を向上させるソーシャルキャピタルの醸成を図る上で重要であり、広く公衆衛生に還元されることが予想される。

研究成果の概要(英文):This study aims to conceptualize the process of acquiring generativity based on an interview research of afterschool-childcare supporting elderlies (15 samples, m: 68.5y, range: 54.0-86.0). The result reveals that those volunteers become to cognize the meaning of participation in the afterschool childcare and willingly furnish children with advice to share their wisdom through a process of (1) motivating, (2) routing and (3) conflicting. The research also finds that the elderlies' own childhood experience of "play-and-learn" facilitates to control the relationship with acting-out children in an enjoyable mood. An experience of conflict with children and its resolution are found to boost elderlies' confidence in development of the next generation resulting in their generativity acquisition.

研究分野：公衆衛生看護学，発達心理学

キーワード：generativity 世代性獲得過程 質的研究 概念化 ライフストーリー 高齢保育ボランティア 放課後学習支援 世代間交流

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 世代性の定義の捉え直し (社会人口学的変化から)

これまで、老年期には3つの危機<引退の危機> <身体的健康の危機> <死の危機> が仮定されてきた (Peck, 1955)。エリクソンは、それらの危機に対峙する老年期の発達課題を、過去の人生を再吟味し、折り合いをつけ、納得することとしての<自我の統合>とし、自身の人生を受容できない状態を<絶望>と定義した (Erikson, Erikson, & Kivnick, 1986, 1990)。

しかし、現代に生きる高齢者は、65歳まで雇用されるようになり、<引退の危機>は延期された。エリクソンの調査対象が生きた1950年代の日本人の平均寿命は、男性58歳、女性61.5歳だが、2010年には男性79.6歳、女性86.4歳に伸長した (厚生労働省「簡易生命表の概況」, 2010)。このように、<身体的健康> <死>の危機は、世代性が定義された頃と比べて、約20年先送りされたといえる。

また、青年期以降の子育て世代のライフステージも大きく変化しており、母親の第1子出産年齢の平均は、30.7歳 (2015) で、ひとり親 (母子) 世帯は、85万世帯 (1988) から124万世帯 (2011) へ1.5倍増加し、父子世帯 (同年比較) は、17万世帯から22万世帯へ1.3倍増加している (厚生労働省「平成23年度全国母子家庭等調査」)。

こうした子育て世代の状況は、高齢の祖父母世代が、<孫育児>などの子どものケアに関わる機会と時間の増加に関連しており、実際に、55歳~74歳の男女の7割以上の祖父母が、孫育てを経験していることが明らかにされている (第一生命研究所, 2015)。

以上のように、現代に生きる高齢者は、自らの健康や死の危機と同時に、<孫育児>や、<就業の継続>など、次世代を育て、文化や技術を伝承するといった中年期の発達課題である「世代性 (Erikson, 1986, 1998)」をも持ち越していることが予想される。

(2) 実証研究からみた「世代性」構造と課題

Erikson (1986, 1998) は、「世代性 (generativity)」を中年期以降の発達課題に据え、親であることを一義的なものとし、「次世代を確立させ導くことへの関心」と定義した。

しかし、Kotre (1984) は、社会全体へ個の文化が還元を世代性の中心に据えた。また、世代性の構造は、自己発展的な自己の存在様式である「個性 (agency)」と、社会の中の相互に存在の必要性を認め合う「関係性 (communion)」の2相から成り、その動機は「自分の死後にも残るような生き方や仕事に身を投じようとする欲求」であると考えた。

このような Kotre (1984) の「世代性」定義は、実証研究においても援用され、世代性の前提条件<個体性と関係性への欲求 (必要とされるニード)>が、媒介要因の<世代性への関心>を刺激して、<世代性行動>を惹起する構造が明らかにされている (McAdams & de St. Aubin, 1992, 1998)。Figure 1)

しかしながら、McAdamsら (1992, 1998) が提起した世代性の概念構造は、実証化される中で、個別のライフヒストリーで語られたはずの個々の世代性行動への<動機>から<関心>に至る過程など要素間のつながりが抽象的な定義に収束されてしまっている。その結果、年齢

的・退行的変化など、個別の流動的な営みは平均化され、抜け落ちている。

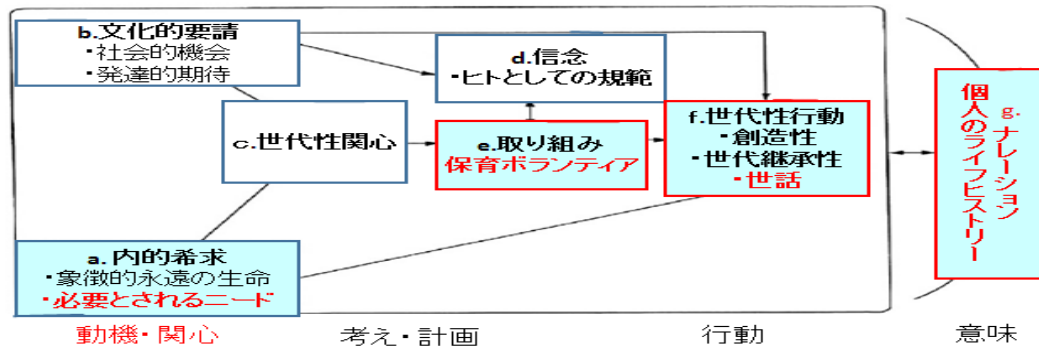


Figure 1) 世代性の要素の全体図 (McAdams & de St.Audin(1992)より、丸島 (2009) 作成)

・本研究の目的および学術的独自性と創造性

(1) 本研究の目的

本研究は高齢者を対象に、「保育」という世代性行動に焦点化して、個別のライフヒストリーに語られる時間的経過に沿って逡巡する意思や意味づけを反映した動的な構造としての「世代性」獲得の過程を概念化することを目的とする。

(2) 学術的独自性と創造性

国内の高齢者の保育活動と世代性に関する研究は極めて少ないが、次世代を直接的にケアする世代性行動は、高齢者自身の経験が遺憾なく発揮され、幼少時の自己を投影し、負の記憶を再構成する治療的な側面があることは示唆されている (Medeiros, 2007 ; 諏澤, 2016) 。しかし、高齢者による子どものケアは、高齢者の運動機能や認知発達の衰えによる危険性も懸念され、未だ全国的な広がりをみせていない。

本研究の結果からは、超高齢化社会を迎えた我が国において、次世代育成の観点と併せて、高齢者に期待される役割とその有益性を再考し、ソーシャルキャピタルの醸成を図るための示唆を得られることが期待される。

2 . 研究の目的

広義の保育に従事する高齢者の世代性発達の形成過程を動的構造から質的に明らかにすること、すなわち、世代性の<動機> <関心> から<行動> に至る過程のきっかけや、意味づけなど、要素間のつながりを説明する概念を、具体的一般的なレベルに還元して言語化し、定義づけることを本研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) インタビュー調査 (H30_2018 年度)

対象

放課後学習支援プログラムに従事する中高年の保育ボランティア 15 名

(M=68.5 歳, range54.0-86.0)

「協力依頼書」を機関に留め置き配布し、応募のあった者

調査の主旨を記載し口頭で説明。同意書を交わし同意の得られた対象に実施した。

方法

- ・ 期間：2018 年 12 月～2019 年 3 月
- ・ 時間：約 1 時間 / 人
- ・ 内容：半構造化インタビュー調査 (Q1～Q2)
 - Q1.活動契機
 - Q2.活動メリット
 - Q3.活動を困難にした出来事
 - Q4.孫と一時保育児とのかかわりの違い
 - Q5.祖父母との思い出
 - Q6.子ども時代の思い出
- ・ 場所：研究者の所属機関の研究室
- ・ 謝礼：図書カード (インタビュー協力者に対して、1 人あたり 1,000 円分)
- ・ 分析：M-GTA (修正版グランデッドセオリー) による質的分析
データの逐語化, 解釈とコーディング概念化, 定義づけ, 理論化
- ・ 倫理：所属機関の倫理委員会にて研究倫理委員会の承認を得た。
所属大学倫理委員会承認(H30. No. 67)

(2)学会発表を通じた理論の精緻化 (H31/R1_2019 年度)

- ・ 国内 (公衆衛生学会, 学校保健学会)
- ・ 海外 (Generations United 20th Biennial Conference, Portland, USA.)

(3)本研究期間内に明らかにする点

本研究は、高齢保育者の世代性尺度を開発する前段階の概念形成までの期間とする。

本研究で得られた概念は、今後、高齢者を対象とした次世代育成プログラムの内容検討や、評価尺度の開発に活用することを予定している。Figure 2)



Figure 2) 研究のスキーム

4. 研究成果

本研究では、放課後学習支援ボランティア 15 名(M=68.5 歳, range54.0-86.0) のライフストーリーの語りを基に、世代性獲得の過程を概念化した。ボランティアらは、動機形成期、移行期、維持・葛藤期の過程を経て、学習支援プログラムへの参加を有益に感じるようになり、若い世代への助言と、知恵の共有が促されることが示唆された。

また、ボランティアが子ども期に経験した遊びや学びの文化は、暴れるなどアクティビティアウトする児童との関係性をコントロールする傍ら、自らも楽しむことができるツールとなっていた。すなわち、中高年者が経験する児童生徒との葛藤場面の解決は、次世代育成の自信となり、世代性獲得を促していることがわかった。

さらに、ボランティアの《年齢》が児童から家族間ストレスを打ち明けられる「信頼」等「認知的」要素となり、ボランティアが居ることで暴力行動を抑制する《安全基地》をもつ「構造」となり、困碁などの《非言語コミュニケーション》が児童とボランティア双方の心身の復調の契機「互酬」となっていた(諏澤, 2019)。この結果より、高齢保育ボランティアの generativity は、ソーシャルキャピタル(SC)の構成要素である「構造」「認知」「互酬性」と関連が深いことが示唆された。

次年度は、学童保育でのライフスキルの獲得場面にもみる、高齢保育ボランティアと児童の対話から生成される相互作用の影響としての SC の内実を質的に明らかにし、実践の場に還元可能な言語表現によるダイナミックな SC の概念化を目指すことで、地域の世代間交流プログラムの促進に貢献したいと考える。

なお、本研究結果は、国内外の関連学会誌に投稿中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----